

前立腺がん治療薬の 廃棄物処理で 被曝問題

被曝問題



線監視などを行
うために県や市
学識経験者など
で構成する「ラ
ジオメディカル
センター放射線

あることに危機意識を持つ
た住民側は、臨時監視委員
会で専門家を招いて市長に
直接危険性を訴えた。その
結果、市はそれまでの姿勢
とは一転して3月、受け入
れを見送った。「住民の理
解が得られない」（市民環
境部）と判断したためだ。

被曝する危険性がある。そ
れに放射性物質は排出物と
ともに終末処理場へ運ばれ
患者が亡くなれば火葬場の
煙突から漏れ出します。国
の被曝を防ぐ対策は十分と
は思えません」

前立腺がんの骨転移の治
療に使われ、強力な放射線
を発するバイエル薬品の注
射薬の廃棄を巡って、処理
施設の近隣住民らが受け入
れ拒否運動を起こしている
ことがわかった。

にできたがん細胞をたたく。
医学ジャーナリストの松井
宏夫氏がこう解説する。

監視委員会」委員の永田文
夫氏(74)が説明する。

後、どこへ行くのか？
滝沢RMCを運営する日
本アイソトープ協会に尋ね
ると「具体的な保管場所は
セキュリティー上の理由か
ら言えない」との回答。セ
キュリティーの意味を問う
と、「放射性物質という危
険なものだから」とのこと
だった。

厚生労働省の地域医療計
画課では「放射性医薬品を
投与された患者が医療施設
から退出するまでの基準は
医療法にある」としながら
退出後は日本核医学会の定
めたガイドラインを守るよ
う医師が患者に説明するだ
けだという。

岩手県盛岡市に住む30代
の医療関係者が言う。

「放射線の中でもエネルギー
が強力なアルファ線を使
う治療薬の廃棄物が滝沢市
に搬入されようとしている
話を聞き、心配になりました。
た。そんな危険なものを地
元に持ち込まないでほしい
のです」

「アルファ核種の塩化ラジ
ウム2223を使うゾーフィ
ゴは原子炉で作られるよう
な薬で、危険性は従来の医
療用廃棄物の数百倍以上。
そのうえ半減期が22年のア
クチニウム227も混入し
ている。それなのに一般市
民の了解も得ずに滝沢R
M Cに搬入しようとしたので
す」

さらに、ゾーフィゴに関
してまだ問題は残っている
と永田氏は指摘する。

「投与後2〜3日間は小児
や妊婦との接触は最小限に
すること」と書かれている
ものを、患者が二次被曝の
ことをどこまで理解してい
るのだろうか。

このアルファ線治療薬は、
骨転移した前立腺がん患者
に使用する目的でバイエル
薬品が昨年6月に発売した
「ゾーフィゴ」(写真)。

だが、問題は残液や使用
済み注射針、手袋などアル
ファ線で汚染されたものの
処分だ。放射性医薬品の処
分ができる施設は国内には
滝沢市にあるラジオメディ
カルセンター(滝沢RMC)
だけのため、ゾーフィゴも
搬入を見込んで施設と市で
協議が進んでいた。だが、
地元住民から待ったがかか
ったのだ。施設周辺の放射

確かにアルファ線のエネ
ルギーは、使い方を間違え
れば人を殺せるほど強力だ。
2006年にロシア連邦保
安局の元職員、アレクサン
ドル・リトビネンコ氏が毒
殺された事件では、ロシア
政府がアルファ線核種のポ
ロニウム210を緑茶に混
せて飲ませたとされる。

「心配なのは二次被曝です。
体重60kgの患者に6回投与
すると、一般公衆の年間被
曝限度の2千倍近い198
0μシーベルトも被曝して
しまいます。静脈注射後に
患者が帰宅すれば、呼気や
便などから同居する家族が

国会でもゾーフィゴ問題
は論議され始めた。
バイエルホールディング
の広報本部はこうした問題
について、「弊社としては
経緯を見守らせていただい
ている」と回答した。

放射線物質のラジウム2
23を静脈注射で最大6回
まで体内に投与し、骨の中

地元住民から待ったがかか
ったのだ。施設周辺の放射

け危険な物質が身の回りに

便などから同居する家族が

瞬間

週刊朝日MOOK 痛い！首腰ひびくこの病院2017 痛みの解消法がわかる！ 好評発売中 定価980円(税込み)